

# 紫柏山と道教—第三大洞天か

土屋昌明

## はじめに

2012年10月13日、陝西省南部、漢中の近辺にある紫柏山麓の張良廟およびその周辺への調査をおこなった。調査の目的は、司馬承禎の十大洞天で「第三大洞天西城山」が不明とされる問題を考察することである。

司馬承禎『天地宮府図』<sup>1</sup>によれば、第三大洞天西城山は「太玄惣真之天」といい、上宰王君（王遠）が統治していることになっており、場所は未詳という。ただし、司馬承禎は『登真隱訣』を引いて、疑うらくは「終南太一山」か、と言っている。この『登真隱訣』の言及は逸文で、関連する文献がなく、裏付けがとれない<sup>2</sup>。この地には太白山と称される山もあるが、司馬承禎は太白山を第十一小洞天とし、「太白山洞、玄德洞天」「仙人張季連、終南山に連なる」と述べている。こうしたことからすると、司馬承禎は終南太一山と太白山とを別の場所と考えているのか、それとも両者は同一で、第三大洞天と第十一小洞定の同定に揺らぎがあるのか、判断できない。

前稿「終南山子午谷の磨崖碑と第三大洞天」では<sup>3</sup>、第三大洞天を考えるにあたり、これを終南山一帯のこととみなして、太一山、長安の南北軸（子午線）上の場所、終南山へと入っていく子午谷、子午谷に存在する玄都壇、子午谷で発見された磨崖碑などを関連させて考察した。ところが、樊光春教授は『西北道教史』で第三大洞天を終南山の漢中よりある紫柏山一帯のことと考えている<sup>4</sup>。紫柏山は海拔1300～2600メートルあり、秦嶺山脈の主峰たる太白山の支脈である。その点で、「終南太一山」と称する資格は十分に存する。そこで、本研究では文献研究とともに現地調査をおこない、樊光春教授が提出した課題について若干の考察をおこなおうと試みた。

## 1. 紫柏山と道教

まず紫柏山のある陝西省西南の隴南をのぞむ地域と道教の関連をおさえておくべきであろう。樊光春教授の説では、紫柏山一帯の地域には、唐代以前から天師道が盛んな地域であった点が、大洞天とされる要因となったとみている。

この一帯には、かつて羌や氐といった少数民族が居住していた。張魯の五斗米道が漢中に解放区を作ったとき、羌と氐が信徒を構成したようである。氐の支流の賁人は、巴西の宕渠（いまの四川省渠県）に居住していた。その地は巴山にあったから、彼らを巴人といった。のちに略陽の臨渭にうつった（晋の略

注1…『天地宮府図』、『雲笈七籤』巻27。

注2…『初学記』に『福地記』という書を引用して「終南太一山は長安の西南五十里に在り、左右四十里内は皆な福地なり」という。これによれば、終南太一山は太白山をさすようである。ただし、ここでは洞天ではなく福地としている。『初学記』巻5所引『福地記』「終南太一山在長安西南五十里左右四十里内皆福地」。

注3…『洞天福地研究』第2号、2012年2月所収。

注4…樊光春『西北道教史』商務印書館、2010年。

陽郡はいまの甘肅省秦安・清水・通渭などにあたり、臨渭の治所はいまの秦安県の東南にあった)。賓人は李姓を首とする。『華陽国志』巻9によれば、張魯を崇敬した賓人たちが漢中に移り住んだことがわかる<sup>5</sup>。

それ以降、羌人や氐人はこの地で道教信仰を実践していた。そのため、陝西・漢中地区の北朝造像碑には、彼らの道教信仰をうかがえる事例が少なくない。樊光春教授によれば、陝西・漢中地区の北朝造像碑のうち、発願文あるいは供養人の名前がみえる北朝道教造像は79件あり、うち仏道混合のものが24件、道教のものが55件であり、これらは大部分が羌・氐の作であるから、北朝時代まで？族が道教信仰を保持していたことがわかる、という<sup>6</sup>。

この点について、北朝道教造像碑の具体的な事例をより明晰にする必要はあるものの、この地域に天師道の信仰がおこなわれていたことは疑いのないところである。

ところで、洞天説と深い関わりがある魏華存は、『南岳魏夫人伝』などによれば、陝西から東につづく黄河の北岸、王屋山の麓で天師道の祭酒をしていたとされている。したがって、地理的に見ても、洞天説は陝西の五斗米道と何らかの関わりがあった可能性がある。しかし、この問題については、文献的により具体的な事例がほしいところである。

また、樊光春教授は、みずからのフィールドワークと清代の『留壩庁志』巻2「記事・沿革表」などの文献によりつつ、清の乾隆30年(1765)ころまで、紫柏山の頂上には天師道の施設が伝わっており、現在でも山頂の廟として残存している、と考察している。今回の私の現地調査では、この地点を目標に登山したが、時間不足で山頂まで登ることができず、この遺址の確認はできなかった。

樊教授は、『留壩庁志』や現地の石刻資料などから、清代から民国時期までに、紫柏山に龍門派の十方叢林が存在し、地域の信仰および経済の中心地となっていたことを明らかにしている。それによれば、漢の張良を祀る留壩の張良廟が清初に創建され、清末には西北地区で大きな影響を持つ十方叢林を形成した。龍門派の任永真およびその後継者によって、張良廟では何度も伝戒がおこなわれ、伝授を受けた者は陝西・甘肅に広く活躍した。その任永真が編集した『三乗集要』は、近現代の全真道士の必読書の一つとなった。この道観は、政府と信徒・農民との関係を調整する役割を担い、道観を中心とした経済圏を築くとともに、この地における教育にも貢献していた、という。

今回の調査で、張良廟より少し紫柏山よりに登った地点に、多数の清末民国の龍門派道士の墓地を見いだした(次ページ写真)。この地点は、紫柏山に登る古道の登り口にあたり、紫柏山からの湧水が豊富である。かつて観光開発されたようであるが、現在は廃墟となっている。これら道士の墓碑に刻された記録の大部分は、まだ明らかになっていないようである。本稿では現地調査が不

注5…『華陽国志』巻9「漢末、張魯居漢中、以鬼道教百姓、賓人敬信。值天下大亂、自巴西之宕渠移入漢中」。

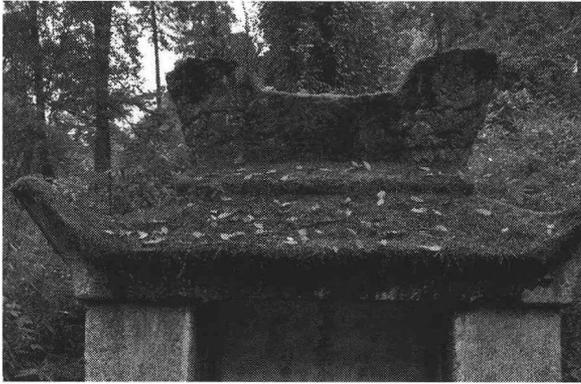
注6…樊光春「陝西留壩張良廟十方叢林志」『全真道研究』2011年第2期。



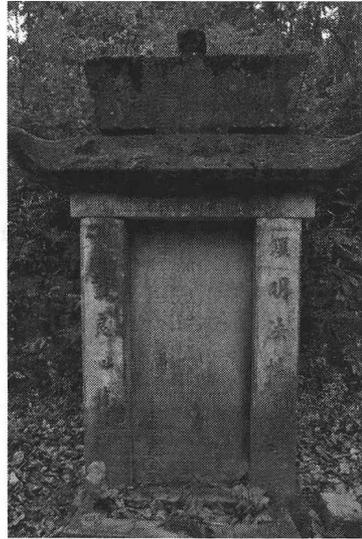
1



2



3



4

1. 留侯廟 2. 紫柏山の森林 3-6. 紫柏山の道士の墓地  
7. 紫柏山の古道



5



6



7

十分であったため、写真の紹介にとどまらざるをえない。

## 2. 張良と天師道

次に、張良廟が道観になっている歴史的背景についてみておこう。

『史記』「留侯世家」によれば、張良はかつて終南山の奥に隠棲したことがあり、商州出身の4人の老人から教えを受けたという。こうした伝説によって、長安から終南山を越えた漢中よりの場所、いわゆる商洛地方には張良の伝説が伝わっている。しかし、張良廟のあるこの地に張良との歴史的な関連性はないようである。そのことから考えると、この地で古くから天師道が信仰されていたことと、張良の伝説とが結びつく契機が存在したと考える方がよいのではなからうか。

その点で注意すべきは、五斗米道の教祖たる張道陵は、名字が張良と同姓であり、張良の子孫とされた点である。

張良と張道陵の関係は、五斗米道が興起してから、かなり早い時期に結びつけられたように思われる<sup>7</sup>。張道陵が神から道術を授かるその場に、張良は神として降臨し、彼を道教の教えに導いた、という神話が作られたのである。五斗米道の「二十四治」を説明した『二十四治図』<sup>8</sup>に、次のような話がある。

張道陵は、沛国豊県の人で、役人として厳しく誠実な仕事ぶりだった。その一方で、養生を心がけて薬草を食べ、神仙を探し尋ねた。漢安元年(142)、後漢王朝の詔を受けて官職の異動を命じられたが、養生を優先して異動に従わず、解任された。その後、四川の益州という所に移った。その年、蜀郡臨邛県の渠亭山にある赤石城という山中で瞑想していた。5月1日の夜半過ぎに、彼が瞑想していると、千乗万騎が赤石城の前にやって来るのを目にした。貴人の車に龍虎や鬼兵が従っている。彼らは張道陵の前に立った。その貴人は5人いたが、その1人が張良であった。張道陵は彼らによって導かれ、太上老君に面会し、「正一盟威の道」を授かった。彼はそれを学んで実践し、「国師」となって、世界に跋扈する「鬼氣」を撃退し、人々を養育することになった、という。

この話は、いつごろできたのだろうか。北周に成書の『無上秘要』に同じ引用文が見えるから、おそらく六朝時代の中頃には、この話は存在していた。420年頃に成立したとされる天師道の経典『三天内解経』巻上にも、後漢の世がしだいに衰えたので、太上老君がこれを憐れんで、「張良の子孫である張道陵」に「道氣」を授けて漢の世を助けさせた、とある。

晋代の伝説を集めた干宝(?~336)の『搜神記』によると、益州には張

注7…以下、張良と張道陵の関係について、『人ならぬもの』の第3章(拙稿)で部分的に述べたことがある。廣瀬玲子編『人ならぬもの』法政大学出版局、2015年12月。

注8…『二十四治図』、『雲笈七籤』巻28所収。

良の先生である黄石公の霊を祀った洞窟があった。それは、次のような話である。

益州の西、雲南の東に神祠がある。山石を開鑿して石室を作り、その下でお祭りをした。「黄公」と自称しており、そのためこの神は、張良が教えを受けた黄石公の霊だと言われている。清浄で動物を殺して犠牲とすることはせず、祈禱する者たちは、一百銭と筆一本と墨一つを持って、石室の中に入っていってお願いをする。するとまず石室の奥から声が聞こえ、しばらくすると、来意を聞かれる。それを述べると、吉凶を詳しく語ってくれるが、その姿は見えない。今に至るもこのように続いている<sup>9)</sup>。

注9…『太平広記』巻294  
「益州之西、雲南之東、有神祠。尅山石爲室、下有人奉祠之。自稱黃公、因言此神、張良所受黃石公之靈也。清淨不烹殺、諸祈禱者、持一百錢、一雙筆、一丸墨、石室中前請乞。先聞石室中有聲、須臾、問來人何欲。既言、便具語吉凶、不見其形。至今如此」。

筆と墨は、張良に一篇の書を授けた黄石公らしいアイテムであり、この祠が黄石公と関連していることを示している。この祠は、動物を殺して犠牲にしないことが特筆されているが、これは五斗米道（天師道）の特徴である。当時の民間の祠などでは、酒や肉が備えられていたが、『三天内解経』では酒や肉を供えることに反対している。したがって、この黄石公の祠には五斗米道の信仰背景があるように思われる。

また、益州は『史記』の張良と黄石公の物語には登場しないのに、どうしてそこに黄石公の霊が出現するのか。この地は、先に『二十四治図』で見たように、張道陵が官界を去った場所であった。益州に黄石公の霊が出現するのは、張良と張道陵との関係が前提されているのではないだろうか。

以上からすると、4世紀初には張道陵と張良が結びつけられていたと考えられる。さらに状況的にみると、これ以前に張道陵を張良の子孫とする説が立てられたと推測される。五斗米道は、後漢末、張道陵の孫の張魯の時に、四川に宗教王国を作り、独立状態を30年近くも続けた。教会の置かれた二十四治が備わったのも、張魯の時代だと考えられる。その張魯が、「国師」たる張道陵の権威づけのために、漢の「国師」となった同姓の張良を先祖に担ぎ出し、この説を作ったものと考えられる。

これは、単に同姓によるだけではなく、張良が道術の先達だからでもある。張良が辟穀や導引を実践したことは、すでに『史記』「留侯世家」にみえている。さらに、張良が黄石公から授かった書物には、兵法だけでなく、仙人になる道も記されていたという解釈が、早くも後漢にはおこなわれていた。晋の葛洪は次のように述べている。

按『孔安国秘記』云、「良得黄石公不死之法，不但兵法而已。」又云，「良本師四皓，角里先生，綺里季之徒，皆仙人也。良悉從受其神方，雖為呂后所強飲食，尋復修行仙道，密自度世，但世人不知，故云其死耳。」如孔安

国之言，則良為得仙也。又漢丞相張蒼偶得小術，吮婦人乳汁，得一百八歲。此蓋道之薄者，而蒼為之得中壽之三倍。況於備行諸秘法，何為不得長生乎。此事見於漢書，非空言也<sup>10</sup>。

注 10…『抱朴子』内篇卷 1。

これによれば、『孔安国秘記』に「張良が黄石公から授かったものは、不死の法でもあり、兵法ではなかった」「張良は（商州の）四皓（4人の老人）を老師としたが、角里先生、綺里季らは、いずれも仙人である。張良は彼らからその神仙の薬方を授かったおかげで、呂后から無理に食べさせられても、そのあと仙道を修行して、密かに昇仙した。ただ、世人はそれがわからないから、死んだと言っているだけだ」という説があったという。『孔安国秘記』は逸書だが、後漢ころに作られた讖緯書の一つであろう。葛洪はそれに基づきつつ、張良は神仙になったと主張している。「もし孔安国の言葉の通りなら、張良は仙人になったのだ。ほかに、漢の丞相だった張蒼は、たまたまつまらない方術によって、すなわち婦人の母乳をすすって百八歳まで生きた。これは軽薄なやり方ではあるが、それでも普通の三倍の長生きである。ましてや張良のように、秘密の法術を実行していたなら、長生を得ないはずがあろうか。このことは『漢書』に見えることであって、空言ではない」。これによれば、張良の伝説には当時、道教と融和的な要素が加えられていたことがわかる。

その上、五斗米道が漢中で活動した時に、その地元では張良の伝説が普及しており、そこに入った五斗米道の集団が、当地におけるみずからの正当性を、教祖と張良の血縁関係によって補強しようとしたとも想像される。

### 3. 天坑と洞天

紫柏山には、カルスト地形による数多くの鍾乳洞が存在する。実際にどれほどの数の洞窟が存在するのか不詳だが、現地では 72 洞と言われている。72 という数字は、司馬承禎があげる七十二福地と同じであり、形式的な数ではあるが、相当数の洞窟があるようだ。中でも玄女洞と称する洞窟は、奥が 1 キロもある鍾乳洞である。こうした地形上の特徴についても、今回は十分調査できなかった。

特に、現地の観光案内などによると、紫柏山には「天坑」と呼ばれる地形が存在する（現地では「天坦」という）。天坑とは、地下の洞窟内で巨大崩落がおこり、それによって地下にホール状の空間ができ、その天上部分が地上に穴ないし陥没を生じさせたものである<sup>11</sup>。現地の説明によれば、この地形は地下に数十メートルから数百メートルもの凹みとなっている。残念ながら、今回は現地の実例を調査することができなかった。

天坑は単なる鍾乳洞以上に、洞天のイメージと直接関わっている可

注 11…蒙可泉ほか「広西黄猷洞天坑国家森林公园的风景資源分析与評価」『广西科学院学报』2004 年 8 月、第 20 卷第 3 期。天坑と洞天のイメージとの共通性については、注 7 の拙稿でも触れたことがある。

注 12…Vies taoistes / Daoist Lives, Colloque international d'études taoistes. In honor of Kristofer Schipper's 80th birthday. 10-12 septembre 2015.

能性がある。巨大崩落でできたホールの下から、はるか彼方の天上にできた小さな穴を望むと、そこから外部の光が射し込んで、あたかも月か太陽のように見える。また、巨大崩落で天上がすべて落ちてしまうと、洞窟の途engahひらけて、周囲を崖で囲まれたポツカリした空間ができる。そこは、事実上は外部と同じだが、周囲を崖に囲まれているために、人跡未踏であるばかりか、生態系も独自に発展する。また、洞窟を通して、他の巨大崩落の天坑と地下でつながっている場合もある。このような天坑の地形と自然環境は、『真誥』に記述された洞天のイメージそのままである。

2015年9月にフランスでおこなわれた国際会議<sup>12</sup>で、福州大学の袁冰凌教授が第一小洞天の霍童山（福州）に関する報告をしたが、その際、ここに白鶴仙翁洞という天坑があることが紹介された。写真によると、白鶴仙翁洞は、巨大な地下ホールの天井部分が大きく崩落したもので、ほぼ真上部分が天空にむかってぽっかり空いており、太陽光線や雨が地下ホールに注ぎ込む。それゆえ、地下ホールの中央部分には植物が生えているが、その周囲の壁近くには植物がほとんど生えていない。

霍童山は茅君と密接な関わりがあり、茅山での楊羲らの誥授以後、早い時期にそれにつながる修道者が居住していた。また、陶弘景も霍童山を重視していた。霍童山が三十六洞天の首位にあるのは、洞天思想において霍童山が重要であることを示している。その霍童山に天坑が存在することは、天坑という自然環境が洞天のイメージーションと関わりを持つのではないかと、という推測をもたらし。それと同様な天坑が紫柏山にもあるとすれば、洞窟をめぐる南方の自然環境と西北のそれが共通性を持つことになる。

## まとめ

以上、樊光春教授の指摘を手がかりにして、紫柏山が第三大洞天であるか否かの問題を考える端緒を探ってみた。紫柏山は唐代以前から五斗米道の教域にあったこと、五斗米道には張良と結びつく要素があり、それは当地における五斗米道の活動に起因している可能性があること、紫柏山には天坑が存在し、それは洞天のイメージとの近似性があることなどを述べた。このような点で、洞天研究および道教史研究における紫柏山の重要性は十分に認識できると言える。ただし、だからといって紫柏山が第三大洞天だったとするのは武断に過ぎると思われる。この問題は、さらなる文献研究と現地調査による考察を必要としている。